

創刊60周年を迎えて

- PROJECT 111 -

野村正勝*



特別寄稿

The 60th Anniversary

当協会も本号で創刊60周年を迎えられました。これも諸先輩方達の御協力のおかげと、心から感謝申し上げます。ところで最近中国からお招きをいただく機会を得ました。

Project 111と言う耳慣れない言葉を聴いたのは昨年だったと思う。中国のstate key laboratoryのある100の大学がそれぞれその分野の著名な研究者を10名ずつ世界ランクが100位以内の外国の大学から呼び、総計1000名の研究者を招聘するという中国政府の絡んだプロジェクトである。わが国では石油精製や石油化学は盛んだが、石油の超重質油の研究となると、皆、泥沼に入りたくなくて石炭研究者の出番となる。そんなことで筆者は長らくこの研究を続けてきた経緯がある。今回Heavy Oil Processingの部門で筆者が招聘された。すぐに要旨や資料を送れという。研究を離れて3年半、当方にはパワーポイントでの美しい資料作成は荷が重いので以前の共同研究者の富山大の村田助教教授に講演要旨を送りプレゼン作成の可否を聞いてみたらすぐに立派な資料を作成してくれたのである。ディスカッションとお礼を兼ねて10月末高岡に彼を尋ねた。

11月初旬に中国を訪ねた。北京到着の翌日午前9時から昌平という市にある中国石油大学の化学工学の会議室で講演が始まった。30人近く学生や教職員がおられZhao教授の紹介の後90分の講演に

入った。相手の力量を探りながら話を進めたが皆真剣に聞いてくれているようであった。10時半ごろに終えてから質問が終了するまで約1時間ほどが過ぎたように思う。Zhao教授の質問の後、大学院の学生達がいくつかのいい質問をしてくれたので議論に熱が帯びた。原油が高騰し重質化しているのでそのプロセッシングは今の中国にとってきわめて重要な課題となっていてその熱気を感じた。講演後は研究室を見学し、その後ホテル(昌平商務会館)で過ぎた講演のことと今勤めている私学の学生たちの講義中の小テストの答案の採点と次週の授業準備に時を過ごした。

講演への彼らの質問を反芻しながら改めてデータを見ていてより明快な結論に結びつく新しい視点を見出すことが出来たのであった。気の重い北京への旅であったが私は大きな収穫を得たのだ。

私の旅は北京で終わらずアモイでのフォーラムで5人のゲストスピーカーの一人として参加し、多くの中国人の研究者が講演した。筆者は中国をもう15回以上も訪ねているがアモイは初めてであった。フォーラムは100人ぐらいの人たちがアモイの壮大なホテルに宿泊して議論するのである。会場は熱気に包まれていた。多くの若い研究者にとってこのフォーラムは確実に彼らを刺激したに違いない。国際会議の開催ではわが国は今や中国と韓国の後塵を拝しているとのことであるが、国の援助の多寡だけではなくコミュニケーション力をもっと磨かなければならないのではないかと思うのである。アモイでは南普陀寺を訪ね信心深い仏教徒の賑わいに、ここは日本かと思ったが、山容の複雑さと樹々の美しさに心を動かされた。そして筆者は偶然、中国禅宗六祖慧能の書に出会ったのである。予期せぬ旅のフィナーレであった。



* Masakatsu NOMURA

1940年6月生
大阪大学大学院 工学研究科応用化学
博士課程修了(1969年)
現在.(社)生産技術振興協会, 理事長,
工学博士, 応用化学
TEL: 072-758-4995
FAX: 072-758-4995
E-mail: MasaFnomura@aol.com